

笠原小学校の英語教育の歩み（４）

— 「笠原型コンテンツ・ベイストの見直し」と「小中連携を含めた文字指導の在り方」 —

The History of English Education of Kasahara Elementary School from 2012 to 2015

— Reconsideration of the Kasahara version of Content Based Teaching and teaching letters —

瀧沢 広人

TAKIZAWA Hiroto

[キーワード]	小学校英語教育, 研究開発学校, 指導方法, Content-Based Teaching/Instruction, 文字指導
[所属]	岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨] 笠原小学校第4期の英語教育研究は、2012（平成24）年度～2014（平成26）年度にかけて行われた。第4期の特徴は、「笠原型コンテンツ・ベイストの見直し」と「文字認識を高める指導」である。「笠原型コンテンツ・ベイスト」については、見直しや改善が図られ、「問題解決的な活動により『聞く・話す・読む・書く』必然を生み出す場面設定」「他の教科・領域で児童の興味・関心が高い学習事項を生かした題材」「驚きや発見、気づきの生まれる伝え合う値打ちの高い内容」の3要件に整理された。また、「文字認識を高める指導」については、第3期に行ったアルファベット調査から、全国平均（83.7%）を下回っていることが明らかになり（笠原小：79.1%）、第4期において、「文字に特化した単元」や「文字に慣れ親しむ時間」を設定し、文字指導を積極的に取り入れることとなる。その結果、第4期の1年次で文字正答率70.6%（2012年度）、2年次で、76.4%（2013年度）、3年次で、84.6%（2014年度）と大きく改善が図られた。本研究は、笠原小学校第4期の研究を整理したものである。

1. はじめに

本稿では、笠原小学校の英語教育研究の第4期の研究を取り上げる。笠原小学校は、2003年の文部科学省指定研究開発学校に指定されてから、第1期（2003～2005年度）、第2期（2006～2008年度）、第3期（2009～2011年度）と、9年間連続して研究に取り組んできた。そして、今回の研究である第4期目は、2012～2014年度の研究となる。ちょうど時期としては、学習指導要領の改訂により、小学校5・6年生に外国語活動が新設され、週1時間、年間35時間の授業が行われることになった時期である。

笠原小学校の第1期の研究は、児童の実態把握を基に、目指す児童像を掲げ、研究テーマ・研究仮説の作成、授業方法の見直しを行い、教科などの内容を盛り込み、伝え合う内容を重視した学習であるコンテンツ・ベイストの手法を取り入れ、授業研究を推進した。最終的に、英語活動の時間であるE学習、英語に慣れ親しむ時間のE活動、さらに、実際に外国人と接し、コミュニケーションを体験するE体験の授業・活動形態をつくり、研究テーマの「英語に慣れ親しみ、進んで英語を使おうとする児童の育成」を目指し研究推進を行った。

第2期では、第1期の研究成果や課題を基に、コンテンツ・ベイストの手法による授業を継承し、2年次（2007年度）に、「笠原型コンテンツ・ベイスト」と「笠原型」と明記した。このことから、笠原小学校で行われている英語教育に一定の型ができたことが推察される。しかし、笠原型とはいったいどういう指導法なのかという定義については、報告書からははっきりしたことは見えてこない。また、第1期と比較し、大きく修正があったことに「指導過程」がある。第1期では、児童の学習過程を、①Greetings & song time ②Practice time ③Activities time ④Comments timeと4つのステップに区切っていたが、第2期では、①Greetings & song time ②Activities time ③Comments timeと3つのステップになっている。このことについては、「1単位時間の授業を3つのステップにすることで、児童の英語活動の中心であるActivities timeが大きな一連の流れになり、児童が自ら活動を理解し、より意欲的に活動できるようになった」と、その意義を報告している（笠原小学

校, 2009:30)。

第3期になり、笠原型コンテンツ・ベイストの中心となる要件が明確に打ち出された。そこには、「児童にとって驚きや発見を生む内容」「教科等の学習内容と関連付けた内容」「聞く・話す必然のある問題快適的な活動」「3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程」の4つの要件をすべて満たす授業づくりの手法を「笠原型」を称している(文科省発表原稿, 2012:2)。

本研究では、笠原小学校第4期(2009-2011年度)の研究を整理・考察する。

2. 本研究の目的及び方法

本研究では、笠原小学校の第4期の研究を整理、考察を行いながら、主に次の2点について整理、考察する。

- (1) 『笠原型コンテンツ・ベイスト』の要件はどのように見直しを図ったのか。
- (2) 文字認識を高める指導をどのように行っていったのか。

(1) では、笠原小学校(2015)で、「新しく『笠原型コンテンツ・ベイスト』の要件を見直した(報告書 p.8)」とある。第1期から取り組んできたコンテンツ・ベイストの授業において、第2期で「笠原型」と名付け、第3期で「笠原型コンテンツ・ベイスト」の全容が明らかとなり、4つの要件が示された。そこに来て、第4期では、その「笠原型コンテンツ・ベイスト」を見直すというのは、どういうことなのか、どのように見直しを図ったのか等、整理し、考察する。

(2) では、第3期に行った「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究(国立教育政策研究所)」を用いてのアルファベット・クイズの正答率が、全国83.7%のところ、笠原小学校6年生は、2011年度で79.1%であった。しかしながら、第4期の1年次で70.6%(2012年度)、2年次では、76.4%(2013年度)、3年次では、84.6%(2014年度)と大きく向上している。第3期での文科省発表原稿(2012)によると「本校児童のアルファベットを読み書きする能力が若干低いことがわかりました。文字を読んだり、書いたりする指導については、ほとんど行ってこなかったことが原因だと考えます」と考察し、第4期に文字指導を入れるようになった。その4期の成果の中で、アルファベット・クイズの正答率が、70.6%→76.4%→84.6%と向上を見られた背景には、どのような指導や環境があったのか見てみたい。

なお、資料は、以下の4冊である。

「平成24年度研究開発実施報告書 第1年次」

「平成25年度研究開発実施報告書 第2年次」

「平成26年度研究開発実施報告書 第3年次」

「教育研究開発学校(小中連携・外国語教育)公表会 平成26年度外国語活動 指導計画集」

3. 笠原小学校 第4期の研究(2012年度~2014年度)

3.1. 研究開発課題と研究の柱

第4期では、研究開発課題を「国際化時代に必要なコミュニケーション能力をはぐくむため、小学校1学年から外国語活動を実施した場合の教育課程、指導方法及び評価方法並びに中学校教育課程との円滑な接続の在り方についての研究開発」とし、以下の10本の柱で研究が進められた。

- ①「笠原型コンテンツ・ベイスト」の指導の方法の改善
- ②外国語活動の目標を具体化した「コミュニケーション能力の素地の段階表」の改善
- ③英語科の目標を具体化し、②との関連を明確にした「コミュニケーション能力の基礎の段階表」の作成
(*「英語科」と言うのは中学校の授業を指している:筆者)
- ④評価規準の明確化と評価方法の究明
- ⑤小学校段階における英語の文字に慣れ親しむ学習の指導方法の開発、
- ⑥効果的な小中連携の実践
- ⑦小中連携における小中兼務教員の効果的な活用

- ⑧中学校第1学年英語科スタートカリキュラムの開発
- ⑨英語教育を支える環境の充実
- ⑩学力調査による検証を踏まえて、将来の小学校における英語教育及び中学校との連携の在り方

3.2. 研究テーマ

笠原小・中学校としての研究テーマは、「生き生きとコミュニケーションを図る児童生徒を育てる指導の工夫～『笠原型コンテンツ・ベイスト』の手法を中心とした効果的な小中連携の在り方～」であり、この研究テーマについては、第3期「生き生きとコミュニケーションを図る児童を育てる指導の工夫～『笠原型コンテンツ・ベイスト』の手法を用いて～」とほぼ変わらない。もともと、本研究開発指定は、笠原小・中学校の両方で受けているため、第1期の研究当初から小中連携（接続）を意図したものとなっている。

3.3. 教育課程

教育課程は、1・2年は年間35時間、3・4年で年間60時間、5・6年は年間70時間となっており、これらは第3期と変更はない。小学校における英語の総時間数は330時間である。

児童が英語に触れる環境としては、E学習とE活動がある。第4期については、外国人と出会いコミュニケーションを体験するE体験については資料がない。E活動については、大きな変化がみられる。帯活動であるE活動を、E活動（えいごリアン）と、E活動（文字に慣れ親しむ活動）の2つに分けて実践している。従来の「聞く・話す」を中心としたE学習に加え、第3期に課題となった文字や読み書きへの慣れ親しむ活動を帯学習として設定している。

3.4. 「笠原型コンテンツ・ベイスト」の見直し

3.4.1. 第1年次の「笠原型コンテンツ・ベイスト」

第1期より、「CBAEの手法を取り入れて」と、英語活動・外国語活動の柱は、「コンテンツ・ベイスト」による授業形態であった。第2期には「笠原型」と命名し、第3期には、「笠原型」のコンテンツ・ベイストに4つの要件を設けた。

- (1) 児童にとって驚きや発見を生む内容
- (2) 教科等の学習内容と関連付けた内容
- (3) 「聞く・話す必然」のある問題解決的な活動
- (4) 3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程

そして第4期になり、笠原型コンテンツ・ベイストの見直しが図られる。第4期第1年次の報告書では、笠原型コンテンツ・ベイストの手法の要件について次のように言う。

他の教科や領域で学習した内容を素材とし、伝え合う必然を重視して、問題解決的な活動を取り入れた「笠原型コンテンツ・ベイスト」の手法により指導し、次の3点をその要件とした。

- コミュニケーションによって、驚きや発見が生まれる内容
- 問題解決的な活動により、コミュニケーションする必然を生み出す場面設定
- 他の教科・領域の既習事項を生かした素材

（平成24年度 研究開発実施報告書, p. 3）

このことは、第3期に発表している内容と多少異なる。

まず(1)の「児童にとって」が、第4期では、「コミュニケーションによって」と変更されている。ここから、題材自体における驚きや発見でなく、児童がコミュニケーションを行う中や、また行った結果、驚きや発見がある内容であることが要件として示されている。

(2)については、「教科等の学習内容と関連付けた内容」が、「他の教科・領域の既習事項を生かした素

材」となっている。このことから、内容（コンテンツ）を扱う際、第3期までは、教科内容そのものを扱って行うことが類推されるが、第4期では、「他の教科・領域の既習事項」という文言から、すでに学習済みの内容を用いて、外国語活動で扱うことを要件にしている。

(3) では、「『聞く・話す必然』のある問題解決的な活動」が、「問題解決的な活動により、コミュニケーションする必然を生み出す場面設定」に変わっている。大きな趣旨には変わりはないが、問題解決的な活動を与えることによって、コミュニケーションを行う必然性をもたせる場面設定が行われているかということが問われている。

そして第4期では、(4) の「3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程」が削除されている。

3.4.2. 第2・3年次の「笠原型コンテンツ・ベイスト」

第2年次（2013年度）には、第1年次に示した3つの要件を《以前の》と言い、すでに見直しを図っている。

《以前の「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件》

- ・コミュニケーションによって、驚きや発見が生まれる内容
- ・問題解決的な活動により、コミュニケーションする必然を生み出す場面設定
- ・他の教科・領域の既習事項を生かした素材

↓

《新しく改善した「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件》

- ・問題解決的な活動により「聞く・話す・読む・書く」必然を生み出す場面設定
- ・他の教科・領域で児童の興味・関心が高い学習事項を生かした題材
- ・驚きや発見、気付きの生まれる伝え合う値打ちの高い内容
 - ア 自分の意志や考え
 - イ 仲間がもっていない自分だけの情報、オリジナルな情報
 - ウ 他の教科・領域の理解を広めたり深めたりすることのできる情報

(平成25年度 研究開発実施報告書, 報告書p. 7)

このような見直しが図られた背景には、次のような理由がある。

平成25年度は、第4学年から第6学年の児童を対象にして、単元の学習後に意識調査を実施した。児童は単元での活動自体やコミュニケーションを通して新しいことを知ることを楽しんでいる反面、いくつかの単元ではコミュニケーションの際に、内容の深まりや広がりを求める余り、言語材料が複雑になっている傾向があり、それが児童の負担になっていると考えた。

そこで、単元で児童が伝え合う情報をより具体的にすることで、扱う言語材料をより平易なものにできると考え、以下のように、新しく「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件を見直した。

(平成25年度 研究開発実施報告書, 報告書p. 7)

背景には、言語材料の複雑さから、できるだけ平易なものを扱うことが記されている。例えば、第2期（2006年度）より継続的に行ってきた小学校2年生の単元に「はにいいものはなあに？」がある。ここでは、言語材料としてIs this good or not good for our teeth?が用いられていたが、第4期の指導計画では、Good (for teeth) or bad (for teeth)?と平易な表現に変更されている。また、単元自体を変更し、新たな単元の下、平易な言語材料を用いる工夫もされている。

この指導計画上の「内容」については、「内容」というまとまりで今後整理していきたいと考える。

3.5. 文字認識を高める指導

第4期では、第3期の反省を下に、「英語の文字に慣れ親しむ指導」を開始した。方法は2つある。1つは「帯時間における活動（E活動）」と、もう1つは「文字に慣れ親しむ学習に特化した学習（E学習）」の2つの方向からである。また、文字になり親しむ学習に特化していない単元でも、絵カードに綴りを載せたり、文字プリントを配付したりしながら、文字や読むこと・書くことに慣れ親しませている。

3.5.1. 帯学習における活動（E活動）

もともとE活動とは、英語に慣れ親しむ時間として、第1期の研究より行われていた。第4期に入り、従来通りの聞くこと・話すことを通じて英語に慣れ親しむ時間に加え、文字に慣れ親しむ時間として、新たに設定された。始業前の15分間を年間12回の計画で行った。内容は、「アルファベットの名前読みに慣れ親しむこと」「アルファベットの形に慣れ親しむこと」「フォニックス学習を通して、音読みの仕方を知ること」の3つである。

1年次は、どの学年も文字を扱うことでは初年度ということがあり、どの学年も同じ内容で行った。内容としては、アルファベットソング、アルファベットビンゴ、アルファベットの色塗りなどを行った。また、フォニックス学習では、bとpの音の聞き分けや発声の仕方、t,d,k,gに対しても同様に扱い、アルファベットの持つ音に注目させている。また、pb/td/kgの音が含まれている単語を読み上げ、音を識別する学習も行われた。例えば、bの音を聞き取らせるために、boxとfox、bedとred、batとhat、それぞれ2つずつの語を聞き、bの音で始まっている単語に○をしたり、教師が発音した単語のはじめの語を抽出し、その文字カードを掲げる活動を行った。

2年次には、前年度の積み重ねから、各学年で学習内容に差をつけ、新しい計画で行った（表2）。第1学年では、アルファベットの各文字をモールや数え棒を用いて文字を作ったり、第2学年では、町の中にある看板やお菓子の袋から各小文字を探したりする活動を行い、文字の形と名前に慣れ親しむ学習を行った。第4学年では、問題解決的な視点を文字学習においても取り入れ、教師が読み上げた音を組み合わせ、単語をつくり、その単語を手がかりに当てはまる絵を探す活動を行っている。さらに6年生では、仲間に単語を書いてヒントを与える活動を行っている。

表2 帯時間の活動における文字等に慣れ親しむ指導（2年次：2013年度）

学年	内容
第1学年	アルファベットの各大文字の形と名前
第2学年	アルファベットの各小文字の形と名前
第3学年	アルファベットの各大文字と小文字のマッチング
第4学年	アルファベットの音読みと、英単語の音声と綴りの関係
第5学年	英単語の音声と綴りの関係（読み）
第6学年	英単語の綴り（書く）

2年次のこれらの学習の成果を振り返り、3年次においても、児童が楽しみながら文字の形や単語の音と綴りの関係について体験的に理解する活動や読み書きの必然性のある問題解決的な活動を継続して行うこととし、学年内や学年をまたいだって配列を見直し、3年次では、次のような内容で文字に慣れ親しむE学習の時間とした。

表3 帯時間の活動における文字等に慣れ親しむ指導（3年次：2014年度）

学年	内容
第1学年	アルファベットの各大文字の形と名前
第2学年	アルファベットの各小文字の形と名前
第3学年	アルファベットの各大文字と小文字の形と名前
第4学年	単語をひとまとまりとしてとらえる活動（音声から綴りへ）
第5学年	単語をひとまとまりとしてとらえる活動（音声から綴りへ）からアルファベットのもつ音
第6学年	アルファベットのもつ音と英単語の綴り（文字の配列）

（「平成25年度 研究開発実施報告書 第2年次」報告書pp.11-12）

特徴は、4年生以降で、単語をひとまとまりとしてとらえる活動を中心としたことである。2年次での活動

においては、単語を単発に提示していたが、3年次のE学習では、外国語活動等で音声で十分に慣れ親しんでいる単語を選び出し、それを「野菜」「動物」のようにカテゴリーに分けて扱い、1つのカテゴリーで、1つの単元として指導計画に位置付けた。各単元を3回で構成し、最初の2回をカルタや神経衰弱等のゲームを通して単語を読むことに慣れ親しむ時間とし、3回目はそれらの単語を活用した時間としている。しかし後々の反省では、それでも時間が少ないと出ている。

3.5.2. 文字等に慣れ親しむ活動に特化した単元の指導 (E学習)

第4期の英語活動の時間 (E学習) では、単元の指導計画に「文字に特化した単元」を位置付けている。第1年次には、6年生で最後の単元を「すごろくを作ろう」とし、7時間扱いで「文字に慣れ親しむことに特化した」単元を作成している。実際にすごろくを楽しむ過程で英文を読んだり、自分たちで楽しむためにすごろくを作る過程で英文を書いたり、疑問文や命令文を読んだり書いたりすることで、文字や読み書きに慣れ親しむ活動としている。また単語の終末では、下級生である4年生と遊ぶために、自分たちですごろくを作り、それを用いて、交流を図り、言語活動に意味を持たせている。

2年次には、5年生で「指令! 暗号を解読せよ」の単元を組み、児童自身が例文を作り、指示通りに進んでいくと、その児童が作ったカードがもらえるという、問題解決的な活動となっている。この活動により、「小文字には高さの違うものがあること」「綴りの長さと言音の長さには関係があること」「命令文は動詞から始まること」「単語と単語の間にはスペースがあること」等の気づきにつながったと記している。また6年生での「暗号を解読せよ～全校版～」では、下級生が英文の内容と正しく理解できるように、より正確な英文、文頭は大文字で書くこと、単語と単語の間はスペースを置くことなどに気づき、相手意識を持った活動になっている。

3.5.3. 文字に慣れ親しませる日常活動の工夫

3.5.3.1. 単語や英文の積極的な提示

日常の外国語活動の授業においても、文字に特化はしていないが積極的に文字を扱い、絵カードを用いる際も、イラストには綴りを載せ、その綴りの大きさも学年によって変えるような工夫がみられる。例えば、低学年ではイラストは大きく、綴りは小さく。中学年では、イラストがやや小さくなり、綴りはやや大きく表示する。さらに高学年では、綴りが中央にあり、イラストは右下に載っているというように、文字や単語の綴りに意識を向ける工夫をしている。

また、3年生以上では、英文の音声で十分に慣れ親しんだ後、英文を黒板に掲示する等、単語や英文を積極的に提示している。

3.5.3.2. 文字プリント

児童が英語の文字に興味を示し、英文や単語を書きたいと思ったときに書くことができるよう、各単元における英文と英単語を掲載した「文字プリント」を配布している。児童はこの文字プリントをファイリングし、単元ごとの表現集を手元に置くことで、自分で調べ、書くことができるよう工夫している。

3.5.3.3. 校内掲示

校内における掲示物についても、積極的に英語で表記し、児童の目に触れるようにしている。このことについては、第4期に限らず、実施してきている。

4. 笠原小学校 第4期の研究の「成果と課題」

以上のような取組により、笠原小学校の第4期の成果では、英語の技能について、次のような結果を示している (表4及び表5: 太字強調は筆者)。

スピーキング (聞くこと・話すこと) については、第3期において調査を開始して以来、全国の正答率よりも高い数値が見られている。一方、アルファベットについては、全国の83.7%を第3期は下回っていたものの、

第4期に入り、文字に慣れ親しませる学習を取り入れた成果もあり、3年次には、全国の正答率を超えた。これにより、笠原型コンテンツ・ベイストの手法による英語教育は、「聞く・話す・書く」の分野で一定の成果があることが確認された。

表4 小学校における英語教育の在り方に関する調査研究（国立教育政策研究所）
「スピーキング（聞くこと・話すこと）」における調査結果（数値は正答率）

年度	学年	正答率
【スピーキング（聞くこと・話すこと）】		
平成21年度	第6学年	77.3
平成22年度	第6学年	84.0
平成23年度	第6学年	84.6
平成24年度	第6学年	88.5
平成25年度	第6学年	89.3
平成26年度	第2学年	62.0
	第4学年	86.0
	第6学年	87.0
		(全国 76.2)

表5 小学校における英語教育の在り方に関する調査研究（国立教育政策研究所）を用いた比較
「アルファベットクイズ（書くこと）」における調査結果（数値は正答率）

年度	学年	正答率
【アルファベット・クイズ（書くこと）】		
平成21年度	第6学年	79.9
平成22年度	第6学年	86.8
平成23年度	第6学年	79.1
平成24年度	第6学年	70.6
平成25年度	第4学年	60.4
	第6学年	76.4
平成26年度	第6学年	84.6
		(全国 83.7)

5. 考察

本研究の目的は、笠原小学校における研究開発校としての取組を記録・整理し、教科化された外国語科における授業への教育財産を残すことにある。大きく2点について、考察を行う。

1つは、「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件を見直し、精選を図っている点である。詳細については、本稿3.4.2 で確認しているが、その要件の見直しに際し、指導計画集の単元についても、次の視点で見直している。1つは、「笠原型コンテンツ・ベイストの3つの要件を十分に満たしているか」であり、もう1つは「言語材料に十分に慣れ親しむことができる指導過程になっているか」である。一例として、小学校6年生における社会科を取り上げたコンテンツ・ベイストがある。その単元では、外国についての情報を得たり、そこで暮らす人々の思いに共感したりすることを体験的に学べるように計画したものだ。そして授業では、see, eat, buy, enjoyといった動詞を用いながら、その国の情報を交流する活動である。しかし、このことは、簡単な情報のみを扱うこととなり、「社会科の学習との関連では不十分であるという課題が残った」と報告している（笠原小学校, 2014: 報告書6）。そこで、伝え合う内容を世界文化遺産とすることで、その歴史やそれに関係する人々の生き方や思いに触れさせることをねらった授業に変更した結果、児童は異なる文化や風習を理解し、尊重しようとする態度につながり、社会科で学習した内容と関連付けながら意欲的にコミュニケーションに取り組めたという。このことから、新しく改善した「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件を、「驚きや発見、気付きの生まれる伝え合う値打ちの高い内容」とし、そのコミュニケーションで伝え合う内容

を次の3つに細分化している（ア 自分の意志や考え イ 仲間がもっていない自分だけの情報、オリジナルな情報 ウ 他の教科・領域の理解を広めたり深めたりすることのできる情報）。このことで、児童が伝え合う情報をより具体的にすることで、扱う言語材料をより平易なものにできると考えてのことである。しかしながら、大きく要件を見直す理由としては、資料及び報告書からの読み取りでは限界がある。よりよい方向へ、「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件が変更されていることから考えると、ここの詳細については、また今後の課題としたい。

2つ目は、「文字認識を高める指導」である。基本的に、指導した分だけ児童には成果が残る。基本的なことではあるが、指導していないことはそれについての成果は見られない。今回、第4期にして笠原小学校が文字指導を含めた読み書き指導を行い、3年目には全国の正答率を上回り、成果をあげたことは、教科化となった現在の読み書き指導に大きな示唆を与えてくれる。その1つは、帯学習（E活動）における文字・綴り指導でないかと考える。外国語の単位授業時間だけでなく、文字や読み書きをねらいとした帯学習の時間の設定は、帯活動での目標が「文字に慣れ親しみ、読むこと・書くことに慣れ親しむ」という1つの明確な目標の下、行なわれる。日常の授業（E学習）では、聞くこと・話すことが主眼となり、小中連携を図る上で大切な読む・書くがどうしても疎かになりがちである。また、読むこと・書くことは時間のかかる学習である。1単位時間45分の英語の授業で、15分の読み書きの時間は、そう確保できないと考える。そこで、笠原小学校のように、単位時間外での帯学習として、文字・読み書き学習を取り入れるのは、1つのよい方策ではないかと考える。このことから、笠原小学校に限らず帯学習の時間で文字・読み書き指導を行っている学校は、全国にも他にあるだろう。その実態を把握し、成果と課題を整理することは、現在の教科化となった外国語の授業において、大きな指針が見いだせることと考える。

6. 終わりに

第1期から第4期までの笠原小学校の英語教育の歴史を追ってみた。各期、それぞれ特徴があるが、第4期での成果・特徴は、小中連携を意識した「文字・読み書き指導」にあるのではないかと考える。それまでは、文字・読み書き指導を授業で取り入れていなかった笠原小学校は、第4期になって初めてE授業やE活動において「文字・読み書き指導」を指導計画に入れている。そして、3年次には全国の正答率を超えた。笠原小学校が実践した文字に慣れ親しむ学習は、「アルファベットの名前読み」「アルファベットの形」「フォニックス学習を通しての音読み」を中心に意図的・計画的な教育実践である。今後の、「笠原型コンテンツ・ベイスト」や「文字に慣れ親しむ学習」が、どのように発展していくのかは、第5期の研究で整理したい。

参考文献

- 笠原町立小学校・笠原中学校（2009）.「平成20年度 研究開発実施報告書（H18年度～H20年度研究のまとめ）」
- 多治見市立笠原小学校（2012a）.「文科省発表原稿」
- 多治見市立笠原小学校（2013a）.「平成24年度 研究開発実施報告書 第1年次」
- 多治見市立笠原小学校（2014）.「平成25年度 研究開発実施報告書 第2年次」
- 多治見市立笠原小学校（2015）.「平成26年度 研究開発実施報告書 第3年次」
- 多治見市立笠原小学校（2014）「教育研究開発学校（小中連携・外国語教育）公表会 平成26年度外国語活動 指導計画集」